

2009年度 大阪大学 前期 日本史(文学部・外国語学部)

(I)

「倭の五王」は、5世紀、中国南朝の宋に朝貢した5人の王のことで、『宋書』倭国伝に記されている。彼らは中国皇帝の臣下となって官爵を授かることにより、その権威を借りて倭人社会と朝鮮半島における権力の確立を図った。そして倭王武の頃には埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘や熊本県江田船山古墳出土鉄刀銘にみられるように、関東や九州の豪族をも服属させ、中国の権威を借りつつも、大王として独自の権威と支配秩序を整えていた。(200字)

(II)

北条泰時は執権を補佐する連署をおき、評定衆を選んで政務の処理や裁判にあたらせるとともに、独自の武家法として御成敗式目を制定し、北条時頼は引付を設けて迅速で公平な裁判の確立につとめた。一方、泰時は御成敗式目の制定に際して公家法を尊重する姿勢を示し、時頼は後嵯峨上皇の皇子を将軍に迎え幕府の権威付けとした。このように幕府政治では合議制に基づく執権政治が展開し、朝幕関係は幕府優位のもとで協調関係が続いた。(200字)

(III)

享保期には実学が奨励され、漢訳洋書輸入制限の緩和など蘭学発展の端緒となる政策が取られた。その後も幕府は天文・測地など蘭学の実学的側面を受容し、寛政期には寛政暦の作成を行わせ、化政期には、伊能忠敬に地図作成を命じ、また蛮書和解御用を新設し洋書の翻訳にあたらせた。一方で、化政期のシーボルト事件や、天保期のモリソン号事件を批判した洋学者に対する蛮社の獄など、鎖国政策に反する蘭学者の動きを警戒し弾圧した。(200字)

(IV)

1920年代、戦後恐慌、震災恐慌、金融恐慌と恐慌が相次ぐと、日本政府はそのつど日本銀行に特別融資を行わせた。この対応策は経済の破綻を一時的に回避したものの、第一次世界大戦中に膨張した経済界の整理を遅らせ、慢性的な不況状態と工業の国際競争力不足を招いた。一方、多くの産業分野で企業集中・カルテル結成の動きが強まり、財閥が主として金融・流通面から産業支配を進めたため、独占資本・金融資本が支配的な地位を占めるようになった。(207字)